

看護学生の講義・演習・実習による高齢者イメージの変化

須田厚子, 榎本朋子

Changes of Nursing Students' Images of the Elderly Caused by Lectures, Exercise and Practice

Atuko SUDA and Tomoko MASUMOTO

キーワード：高齢者イメージ, 看護学生, 看護教育

概 要

老年看護は、本学第一看護科の教育カリキュラムでは、学生の高齢者を尊重できる高齢者観を育てるよう、講義・演習・実習で教育プログラムを組んでいる。1年次後期に「老年看護学概論」、2年次前・後期に「老年看護Ⅰ」「老年看護Ⅱ」の講義を行い2年次後期「老年看護Ⅱ」の講義終了後、学内で「高齢者疑似体験」の演習、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、デイサービス、グループホーム等の諸施設で1日ではあるが、実習を行っている。今回の研究は、学生の高齢者観を知るために講義開始時・演習後・実習後のレポートから、学生の高齢者に対するイメージの変化を経時的に検討した。その結果、講義開始時はプラスイメージを、演習後はマイナスイメージを、そして実習後はプラスイメージを多く持つという変化がみられた。このことは講義で得た知識と実習で得た経験が統合され、老年看護学の教育の1つの目的である学生の高齢者理解は得られる傾向にあると考えられる。教育プログラムの全行程にわたって学生が持ち続けたプラスイメージは、「精神機能の向上」「人生の先輩」「身体機能の維持」であり、マイナスイメージは「身体機能の低下」であった。また、3年次の老年看護学領域の実習で強化すべき課題を得ることができた。

1. 緒 言

日本の高齢化はますます深刻化し、2015年には、65歳以上人口が3,277万人、高齢化率は26.0%、75歳以上人口が1,574万人、後期高齢化率は12.5%となる見通しであるといわれている¹⁾。この高齢社会に向けて、看護師には、認知症などの要介護高齢者に関する幅広い知識や実際的な支援ができる能力、介護予防に対する積極的な活動能力が特に求められていると考える。その中で本学では、老年看護学の目的として看護学生が高齢者を看護する際によく遭遇する症候や疾患を良く理解したうえで、個々の患者を適切に評価し対応できるようになること、また老年期にある対象の健康状態をアセスメントでき、その対象の状態にあわせて看護を展開するための基本と実践のための原則が理解できることをあげている。しかし、看護学生にとっては机上

で得た知識を、実際に高齢者と接する中で得る経験と統合させながら、高齢者を多様に理解することが難しく、3年次の臨地実習においても、高齢者とのコミュニケーションなどの関係性の構築の部分で戸惑う学生の姿がみられる。その中で教員は、学生と高齢者の関係性の構築の部分に指導時間を多く割いている。

そこで私達は、看護学生が高齢者をどのように捉えているのを知るために、「高齢者のイメージ」を検討する必要があると考えた。看護学生の「高齢者のイメージ」については、祖父母との同居や祖父母の健康状態の影響^{2,3)}、学年進行による変化⁴⁻⁷⁾、疑似体験や演習、実習における変化^{8,9)}など数多くの研究がなされている。その中で相羽他¹⁰⁾は、疑似体験により、加齢現象が心理・精神的側面に影響していることを理解し、高齢者への接し方や看護師としての援助方法を考え、そして学生自身の老いを考えるという方向へ変化していくことを報告している。また、岩鶴他¹¹⁾は、学年が進むにつれ高齢者に対するイメージ数が増加し、2年次で負の表現が増え、3年次で減ることを明らかにしている。3年次ではそのイメージの表現内容がより具体

(平成18年9月28日受理)

川崎医療短期大学 第一看護科

The First Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

的になっているが、高齢者の特性のうち心理面に眼を向けがちで、身体面・社会面をみる弱さや難しさが課題であるとしている。

以上の事から本研究は、本学の老年看護学の学習経過に沿って看護学生が持つ「高齢者のイメージ」の変化を検討し、その後の3年次での老年看護学実習における追加すべき指導課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 研究対象

川崎医療短期大学第1看護科32期生（平成16年度入学）96名である。

2) 研究期間

平成17年4月～平成18年3月である。

3) データ収集方法

看護学生に対して、老年看護学Ⅱ講義初回時（1回目）、高齢者疑似体験後（2回目）、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、デイサービス、グループホーム等の施設で1日実習後（3回目）にそれぞれ課題を与え、1週間の期限を設けてレポート提出を求めた。課題の内容は下記に示す。

- (1) 高齢者のイメージについての自由記載（1回目）
- (2) 自分が描く老人像についての自由記載（2回目）
- (3) 一日実習の感想（3回目）

4) 分析方法

レポートの記述の中から、高齢者のイメージに関連して記載されている文脈を1記録単位（1文章1意味）として抽出し、それらの内容をコード化し、それぞれ類似性のあるものでまとめ、カテゴリー化を行った。

5) 倫理的配慮

対象となる看護学生に、研究の趣旨・目的、匿名性は守られる事、また成績などに影響することはないことを口頭で説明し、同意を得た。

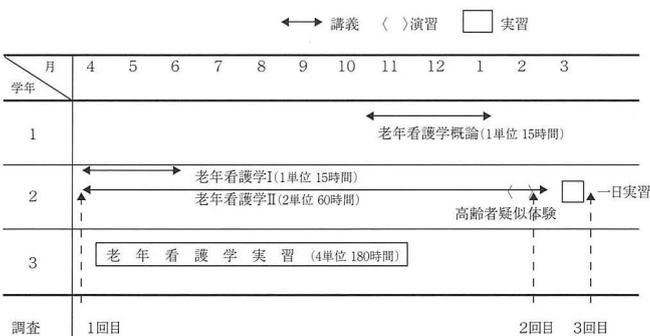


図1 老年看護学カリキュラム進度

データ分析については、老年看護学を担当している教員2名により協議し、合意を得ながら検討した。

6) 老年看護学の概要

本学の老年看護学及び調査の概要を図1に示した。本学の老年看護学は、1年次で「老年看護学概論」1単位15時間でライフサイクルの観点から老年期の人々の基本を学び、2年次より「老年看護学Ⅰ」1単位15時間で疾患や病態を学習している。その上で「老年看護学Ⅱ」2単位60時間で看護を中心とした講義を行い、2年次後期に、演習として高齢者疑似体験およびレクレーション・グループワークを実施している。その後、2年次の講義終了後に、介護老人福祉施設等8ヶ所にそれぞれ分かれて1日見学実習を行っている。3年次の「老年看護学臨地実習」は、4単位180時間であり、大学病院で病棟実習（3週間）と、介護老人福祉施設、通所介護デイサービスセンターで実習（2週間）を行っている。

3. 結果

対象者96名はすべて女性であった。高齢者との同居経験があるものは46名(47.9%)、同居経験がないものは50名(52.1%)であった。入学までに老人ホームや看護体験で、高齢者と接した経験を持っていたのは、13名(13.5%)であった。

カテゴリーを【 】で示し、サブカテゴリーを[]、コードを『 』で示した。

1) 老年看護学Ⅱ講義初回時のイメージ

老年看護学Ⅱ講義初回時のイメージの結果を表1に示した。

老年看護学Ⅱの講義前に看護学生に対して高齢者のイメージを調査した結果、看護学生96人（回収率100%）から回答を得た。その内容はプラスイメージが165記録単位、マイナスイメージが119記録単位であり、計284記録単位であった。それらをコード化し類似したものでまとめた結果18カテゴリーが得られた。その内容は、プラスイメージとして、【精神機能の向上】【人生の先輩】【生活状況】【死を受容した人】【人柄】【長生き】【自立】【共存】【過去や伝統を伝える】であった。マイナスイメージとして、【身体機能の低下】【知的機能の低下】【援助が必要】【外的変化】【感覚機能の低下】【性格】【疾患】【死】【不安】であった。

2) 高齢者疑似体験後のイメージ

高齢者疑似体験後に看護学生に対して行った調査の結果を表2に示した。

表1 老年看護学Ⅱ講義開始時のイメージ

n = 284

	コード	サブカテゴリー	カテゴリー
プラスイメージ	知恵を持つ, 知識を得た人, 博学, 生き字引, 英知, 冷静な判断が出来る, 頼もしい	知恵, 知識を持つ	精神機能の向上
	意志は強い, 意思を持つ	意志が強い	
	生きがいを持つ, 生き生き, 元気, はつらつ, 活動的な人	生き生きしている	
	第2の人生を歩みだす, 充実した人生	充実した人生	
	自我の統合, 人格が確立した人	自我の統合	
	自分の人生を受け入れる, 人生経験をつんできた人, 人生の先輩, 人生経験が長い, 多くの経験	人生の先輩	人生の先輩
	尊敬できる人, 大きな存在	尊敬できる人	生活状況
	時間がある, 自由にのんびり, ゆったりした時間の中で生活をしている人, 明るい生活, のんびりした生活	ゆったりした生活状況	
	夕方ウォーキングをする, 規則正しい生活 和食が好き, 昔の話を良くする, 早起き	健康的な生活習慣	
	死を受容, 死が近い存在	死を受容した人	死を受容した人
	親切, やさしい, 心が広い, 温厚, いつも笑っている, かわいらしい	好ましい性格	人柄
	長生きしている人	長生き	長生き
	身の回りのことはある程度できる, 自立している	自立	自立
	共存していくべき人, 近所の人と仲がよい	周囲と共存	共存
	戦争体験がある, 伝統を伝える人, プラスイメージ	戦争体験, 伝統を伝える人	過去や伝統を伝える
マイナスイメージ	退行していく, 抵抗力が低下, 病気にかかりやすい, 身体機能の低下, 生殖機能が無くなる, 日常生活が困難, 寝たきりになる, 歩行困難, 運動量の減少	身体機能の低下	身体機能の低下
	身体障害を持つ, 身体的に不自由	障害をもつ	
	体力が衰える	体力の低下	
	心身の低下, 臓器機能の低下, 加齢	加齢による機能低下	
	事故を起こしやすい, 骨折しやすい	怪我や事故を起こしやすい	
	自分でしたいことに制限がある, 自分でできる事が減る	活動制限がある	知的機能の低下
	記憶力低下, 知能低下, 物忘れ	知的機能の低下	
	新しい事柄を受け入れにくい, 気力の衰え	新しい変化に弱い	
	最新の機械に弱い	機械によわい	援助が必要
	誰かの援助を必要とする, 家族の世話になる	援助が必要	
	介護は大変	介護	援助が必要
	弱い立場, 繊細, 孤独, かわいそう	立場が弱い	
	背中・腰が曲がる, しわ・白髪, 小さい	外的変化	外的変化
	視覚低下, 聴覚の低下, 感覚器の衰え, 5感が鈍い	知覚機能の低下	感覚機能の低下
	頑固, 卑屈になる, ネガティブな考え方になる, 怒りっぽい, 口うるさい, 怖い, 厄介な人, 言葉が多い, 感情的	好ましくない, いやな性格	性格
	病気を持つ, 生活習慣病, 認知症が出る, 慢性疾患を抱えている, よく病院へ通う, 骨粗しょう症	疾患を持つ	疾患
	死の恐怖が強い, 死に直面している	死に近い	死
不安が増している	不安	不安	

表2 高齢者疑似体験後のイメージ

n=260

	コード	サブカテゴリー	カテゴリー
プラスイメージ	優しい, 頼れる, かわいい, 明るい, 穏やかな性格, 温和, 温厚, マイペース, 前向き, 生き生きしている	好ましい性格	人柄
	子供が好き, 昔の話が好き	子どもや昔話が好き	
	人生の先輩	人生の先輩	人生の先輩
	経験により知識が豊か, 物知り, 生活の知恵がある	知恵がある	精神機能の向上
	自立した意識が強い, しっかりしている, 生きがいを見出そうとしている, よく話す, 昔の遊びを教えてくれる	精神的に自立している	
	規則正しい生活, 行動の仕方は自由, ゆったりとした生活を送る, 物を大切に する, 無駄がない	よい生活状況	生活状況
	健康である, 自立, 元気だ, 我慢強い, 声大きい, 残存機能	身体機能の維持	身体機能の維持
死の受容期	死の受容期	死を受容する	
マイナスイメージ	歩幅が小さい, 行動がゆったりしている, マイペース, 歩行が困難, 身体が思う ように動かない, 体が重い, 体が衰退, 足腰がもろく弱い, 体力が低下する, 身体機能の低下, 背中への屈曲, 前傾姿勢, 腰が曲がる	身体機能が低下している	身体機能の低下
	転倒しやすい, 危険, ADLに支障をきたす, 事故を起こしやすい, 易疲労, 免 疫力低下	怪我や事故を起こしやすい	
	関節の痛み, さまざまな疾患を持つ, 痴呆, 老い, 病気がち	疾患がある	疾患・障害がある
	何らかの障害を抱えている, 体が不自由, 関節が拘縮する	障害	
	何度も聞き返す, 難聴, 眼が見えにくい, 知覚が鈍くなる, 一日ボーっとして いる, にぶい	感覚機能の低下	感覚機能の低下
	同じことを何度も言う, コミュニケーションがとりにくい, 話が長い	会話困難	コミュニケーション能 力の低下
	寡黙, 物忘れ, 忘れっぽい	物忘れ	
	白髪, 入れ歯, 手がしわしわしている, しわ, 痩せ型, 小さい, 背が低い, 皮 膚が乾燥	外的変化	外的変化
	頑固, わがまま, 口うるさい, 心配性, 自己中心的	いやな性格	性格
	考え方にこだわりがある, 考え方に若者と少し違いがある, 考えが固定	考え方に違いがある	考え方の違い
孤独・孤立, さみしがりや, 室内に閉じこもりがち	孤独	孤独	
自立意識が低い, 周囲のサポートが必要, 日常生活に不安を抱く	依存	依存	

高齢者疑似体験後に課題レポートを実施し, 92人(回収率98.9%)から回答を得た。その中から, 高齢者のイメージに関連した記述を抜き出した結果, プラスイメージは64記録単位, マイナスイメージは196記録単位であり, 計260記録単位であった。それらをコード化し類似したものでまとめた結果, 15カテゴリーが得られた。カテゴリーの内容は, プラスイメージとして【人柄】【人生の先輩】【精神機能の向上】【生活状況】【身体機能の維持】【死を受容する】であった。マイナスイメージとして, 【身体機能の低下】【疾患・障害がある】【感覚機能の低下】【コミュニケーション能力の低下】【外的変化】【性格】【考え方の違い】【孤独】【依存】であった。

3) 実習後のイメージ

1日実習後に看護学生に対して行った調査の結果を表3に示した。

介護老人福祉施設等の施設で1日実習後に, 看護学生に対して実習に対する感想文を課題レポートとして実施し, 89名(97.8%)から回答を得た。その中で高齢者のイメージに関する記述は, プラスイメージが45記録単位, マイナスイメージが29記録単位, 認知症に関連した記述が31記録単位であり, 計105記録単位であった。

それらをコード化し類似したものでまとめ17カテゴリーとした。その内容は, プラスイメージとして【身体機能の維持】【精神機能の向上】【自立した生活を過ごす】【支援が必要】【人生の先輩】【個人差や多様性がある】【継続的な関わりで関係性ができる】【高齢者も同じ人】【繊細】であった。マイナスイメージとして, 【コミュニケーションや関係性作りが困難】【自立困難】【身体機能の低下】であった。認知症高齢者に対して, 【非言語的コミュニケーションの必要性】【コ

表3 1日実習後のイメージ

n=105

	コード	サブカテゴリー	カテゴリー
プラスイメージ	パワーがある, 元気だ, 生き生きとした生活, 楽しそう, 生き生きしている, 生活を楽しんでいる, 機敏な動き, パワーがあまっている	身体機能の維持	身体機能の維持
	自ら率先して役割を見つけている, シャキシャキしている, 楽しそう, 明るい, しっかりと自尊心を持っている, 前向きに生きようとしている	精神機能の向上	精神機能の向上
	何でもしようとする, 意思表示もしっかりしている, しっかりしている, 日常生活に問題がない	自立している	自立した生活を過ごす
	一日一日を楽しみながら生活している	生活を楽しむ	
	本人の意思や周囲の励ましが必要である 大切にされている, 安全が守られている, 健康管理されている	周囲の支援	支援が必要
	暖かい, 尊敬できる, 人生の先輩, たくさんの経験, 人生経験, 豊富な知識を持つ, 様々な知識を教えてくれた, 尊敬すべき人たち	人生の先輩 豊富な知識	人生の先輩
	個人差がある, 価値観がある	個人差がある	個人差や多様性がある
	高齢者といっても様々である, 様々な病気を持った人, ADL レベルの人がいる	多様である	
	ありのまま	ありのまま	
	初対面だと分かりにくい, 毎日接すると分かってくる	継続的な関係の必要性	継続的な関わりで関係性ができる
	こちらから心を開くと必ず応えてくれる, 暖かく迎えてくれた, 必ずコミュニケーションはとれる	関係性	
	高齢者は初めて会う人と同じように接していけばよい, 私たちと同じように若い頃もある	高齢者も同じ人	高齢者も同じ人
	心が非常にナイーブだ	ナイーブである	繊細
マイナスイメージ	頑固でかかわりにくい, 高齢者の男性は, 話をするのが苦手な方が多い, 不安・不満を心の中にとじこめている	かかわりにくい	コミュニケーションや関係性作りが困難
	長い人生の理解は困難だ	人理解の困難さ	
	関係作りに時間がかかる, 信頼関係を築くまでに時間がかかり大変だ	関係性構築に時間がかかる	
	コミュニケーションが難しい, 声のかけ方が分からない, どう接してよいのかわからない, コミュニケーションが難しい, 注意すべき点が非常にたくさんある	コミュニケーションの困難さ	
	反論できない, 施設高齢者は他に行き場がない, 辛くても遠慮がち	高齢者の自立困難	自立困難
	自尊心が低下してくる, 反応がない, 自分を否定する 転倒しやすい, 骨がもろい	自尊心の低下 身体機能の低下	身体機能の低下
認知症高齢者のイメージ	気持ちは伝わる, 認知症でも感情は普通の高齢者とほとんど変わらない, 顔の表情は変化しなくても気持ちでは悲しんでいたたり, 喜んでいたりすることがあると分かった	知的機能や感情の継続	非言語的コミュニケーションの必要性
	非言語的コミュニケーションが大切	非言語的コミュニケーション	
	ありのままの個人と接する事が大切	ありのままをうけいれる	
	コミュニケーションが難しい, どう接していいかわからない, 接することが不安	困難なコミュニケーション	コミュニケーションの困難さ
	認知症は外見から判断できない	見た目ではわからない	同じ人である
	認知症高齢者も健康な人と同じ	認知症高齢者も同じ	
	相手も自分と同じ	相手も自分と同じ	
	様々だ, 非定型的な経過をたどる, 色々な問題を抱えている, 心身的な障害を加重していく一方である	認知症の多様な症状と経過	困難な疾患
	認知症高齢者には周囲の人々が対応困難をきたす	周囲の対応困難	
認知症は予防が大切	予防が大切		
「認知症」という固定観念が自分の中にある	「認知症」という固定観念	先入観	

コミュニケーションの困難さ】【同じ人である】【困難な疾患】【先入観】であった。

4. 考 察

1) 老年看護学Ⅱ講義初回時（1回目）の結果について

看護学生の高齢者に対するイメージを分析した結果、[知識や知恵を持つ][意思が強い][生き生きしている]など【精神機能の向上】が多くを占め、高齢者を【人生の先輩】であり、[健康的な生活習慣]を持ち、[ゆったりした生活状況]をしていると捉えていた。また、日常生活の困難性や諸機能の退行など【身体機能の低下】や【知的機能の低下】を挙げ、【援助が必要】な人であると捉えている。また、【感覚機能の低下】【外的変化】など、加齢からくる一般的な高齢者像をあげており、『頑固』『怒りっぽい』『怖い』等の嫌な【性格】と生活習慣病や認知症など【疾患】をマイナスイメージとしてあげていた。比較するとプラスイメージの方が多いが、『知識を得た人』『ゆったりした時間の中で生活をしている人』『人格が確立した人』など、ステレオタイプ的なイメージを持っているように感じられる。吉本他¹²⁾は、看護学生1,2年生の認知症高齢者に対するイメージの影響因子としてマスメディアであるとしており、看護学生の高齢者イメージには大きな影響を与えていると考える。初回調査時のイメージを看護学生に示しながら、個々の学習により、より身近な高齢者へのイメージにつなげていく講義のあり方が求められると考える。

2) 高齢者疑似体験後（2回目）の結果について

高齢者疑似体験後的高齢者イメージの結果は表2に示したが、プラスイメージとしては『やさしい』『穏やかな性格』『温和』といった【人柄】が多く、『経験により知識が豊か』『物知り』といった【精神機能の向上】や【人生の先輩】などは1回目と変わらず見られた。また、マイナスイメージとしては[怪我や事故を起こしやすい]など【身体機能の低下】が最も多く、『何度も聞き返す』『眼が見えにくい』など【感覚機能の低下】【孤独】を、実際に自分の体に負荷をかけ、身体の拘束を強調した活動を通じた実体験からイメージしていた。これらの自らの体験から、【コミュニケーション能力の低下】を感じ、自立心の低下から【依存】といったイメージとして表現されたのではないかと考える。次に【疾患・障害がある】が多かった。これについては、高齢者疑似体験が老年看護学の講義終了後

であり、すでに学習した知識と体験に基づいた高齢者理解の視点で捉えていると考える。また、1回目と同じく『白髪』『しわ』といった【外的変化】や、嫌な【性格】のイメージは変わらなかった。

高齢者疑似体験後にマイナスイメージが増加していることについては、名倉ら^{13,14)}の研究結果とも一致している。看護学生が高齢者疑似体験を行うことにより、高齢者を感覚的な理解から、さらに深い理解を促したものとする。この疑似体験の中で同時に、看護学生に援助者としての意識を明らかにし高齢者への援助方法を考えるという課題も与えている。高齢者疑似体験から得られた理解を、高齢者の援助へと繋いでいくことが今後必要となると考える。

3) 実習後（3回目）の結果について

実習後的高齢者イメージを見ると、2回目と比較してプラスイメージが増加している。その内容は、『パワーがある』『元気だ』『楽しそう』など、【身体機能の維持】があり、『自ら率先して役割を見つけている』など、【精神機能の維持】を実感している。また、【自立した生活を過ごす】高齢者と直接接触し合う中で、看護学生は【高齢者も同じ人】であり、【個人差や多様性がある】ことに気づいている。そしてコミュニケーションをとりながら関係性を築く中で、【継続的な関わりで関係性ができる】と捉えていた。

マイナスイメージとしては、1回目より【身体機能の低下】は変わらず、その他に、【自立困難】や高齢者に対して[かかわりにくい]、高齢者の[人生理解の困難さ]など、実習の中で感じた【コミュニケーションや関係性作りが困難】という戸惑いをイメージしていた。

また、認知症高齢者に対するイメージとして[知的機能や感情の継続]を実感し、アイコンタクトやタッチングなどの【非言語的コミュニケーションの必要性】を認識しながらも、認知症高齢者との【コミュニケーションの困難さ】を実感している。また、[認知症の多様な症状と経過]から【疾患の症状】をイメージする一方で、『認知症高齢者も健康な人と同じだ』『相手も自分と同じ』であると知り、認知症高齢者も【同じ人である】と感じている。今回実習を行った介護施設では、主に認知症高齢者が約8割を占めている。看護学生は、講義で認知症についての疾患・看護は学習しているが、実際にかかわるのは初めての学生がほとんどである。その中で認知症を【困難な疾患】と認識しながらも、認知症の高齢者を同じ人として認識し、非言

語的コミュニケーションの大切さに気づいていると考
える。

4) ま と め

高齢者イメージとして、1回目から3回目の調査で
継続的に持ち続けていたのは【精神機能の向上】【人生
の先輩】【身体機能の低下】であった。

3回の高齢者イメージを比較すると、疑似体験後は
マイナスイメージを持ち、実習に行き、参加学習を行
うことでプラスイメージ的な内容へと変化していた。
この事から、本学の老年看護学のカリキュラムの1つ
の目的である学生の高齢者理解は得られる傾向にある
と考えられる。しかし、3回目のイメージの変化とし
ても現れたが、高齢者は認知症であるにかかわらず
依存度や疾患のレベルは様々で、個別性が強い。高
崎ら¹⁵⁾が述べているように、高齢者に対して、「単に親
切でやさしい心で看護する」という段階から、科学的
根拠に基づいた効果的な実践内容へパラダイムシフト
する必要があると考える。つまり、私達教員は、看
護学生の【高齢者も同じ人】であり、【個人差や多様性
がある】等、高齢者の個別性や人間性に対する気づき
を支持しながらも、【コミュニケーションや関係性作り
が困難】【非言語的コミュニケーションの必要性】を感
じていることに対して、高齢者とのコミュニケーション
手段としての看護技術や非言語的コミュニケーション
の実施方法について指導強化することが必要である
と考える。

また、【身体機能の低下】【自立困難】等のマイナ
スイメージに関しては、看護学生が高齢者を理解し看護
する上で、高齢者虐待の原因とも言われているエイジ
ズム(ageism)¹⁶⁾につながっていく危険性もあると考
える。高齢者に関する正しい知識や情報があるかどう
かが、高齢者に対する態度と関連していると述べてい
る文献もある¹⁷⁾。このことから私達は看護学生に対し
て、3年次の老年看護学実習において、高齢者を正しく理
解する知識や情報を得られるようなアセスメント能力
育成についての指導強化する必要があると考える。

5. 結 論

本学の老年看護学のカリキュラムに沿って看護学生
が持つ「高齢者のイメージ」の変化を検討した結果、
3年次の臨地実習への課題として以下のことが明らか
となった。

1) 高齢者とのコミュニケーション手段としての看護
技術や非言語的コミュニケーションの実施方法につ

いての指導強化が必要であること。

2) 高齢者を正しく理解する知識や情報を得られるよ
うなアセスメント能力育成についての指導強化する
必要性があること。

6. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた学生・教
職員の皆様方には深く感謝いたします。

7. 引用文献

- 1) 厚生労働省：高齢者介護研究会報告書「2015年の高齢者介護」平成15年6月26日、2006-08-18。http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou.html
- 2) 家里かおり，渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会論文集（老年看護）35：82-84，2005。
- 3) 渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集 24：322，2004。
- 4) 石井知子，山本真弓，平田ナツ子：高齢者看護の教授方法を考える 看護学生の高齢者イメージの変化，聖マリア学院紀要 14：67-70，1999。
- 5) 古城幸子，木下香織：老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化（第1報）老年看護学Ⅰの授業評価，新見公立短期大学紀要 23：53-60，2002。
- 6) 古城幸子，木下香織，馬本智恵：老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化（第2報）老年看護学Ⅱ演習の授業評価，新見公立短期大学紀要 24：25-33，2003。
- 7) 滝川由美子，吉本知恵，横川絹恵：看護学生の高齢者イメージの変化 老年看護学概論の授業前・後の比較，香川県立医療短期大学紀要 1：51-60，2000。
- 8) 渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究 老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了までの変化，山梨県立看護大学短期大学部紀要 11：159-166，2006。
- 9) 沖中由美，中野静子：看護学生がいただく老年イメージー老年看護学の講義および実習前後の変化一，愛媛県立医療技術短期大学紀要 14：43-48，2001。
- 10) 相羽利昭，山村江美子，板倉勲子：高齢者疑似体験による高齢者のイメージと高齢者理解の変化 看護学生の高齢者イメージの自由記述の内容分析から，聖隷クリストファー大学看護学部紀要 11：119-126，2003。
- 11) 岩鶴早苗，天津榮子，水田真由美，水主千鶴子：看護学生の高齢者観育成に関する研究（第2報）ー3年間を縦断的にみる高齢者観の分析一，和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要 4：37-46，2001。
- 12) 吉本知恵，横川絹恵：看護学生の高齢者イメージに対するイメージと看護観および影響因子ー3年生看護短大生の学習進度による比較一，日本看護学教育学会誌 14：35-45，2004。
- 13) 名倉順子，天下井深雪：老年観育成の試みー高齢者に対す

- るイメージの変化～，神奈川県立平塚看護専門学校紀要 11：17—23，2005.
- 14) 服部紀子，中村真理子：老人イメージの変化—高齢者擬似体験前後の比較から—，東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報 11：12—25，2001.
- 15) 高崎絹子，水谷信子，水野敏子，高山成子：最新老年看護学，東京：日本看護協会出版会，p.35，2005.
- 16) Butler RN：Age-ism：another form of bigotry, Gerontologist 9：243—246，1969.
- 17) Harris LA and Dollinger S：Participation in a course on aging：Knowledge, attitudes and anxiety about aging in oneself and others, Educ. Gerontol. 27：657—667，2001.